

## SER no.069; はじめに

著者	朝倉 敏夫, アサクラ トシオ, Asakura Toshio, 岡田 浩樹, オカダ ヒロキ, Okada Hiroki
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	69
ページ	1-4
発行年	2007-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/1989">http://hdl.handle.net/10502/1989</a>

## はじめに

朝倉敏夫・岡田浩樹

本書は平成15年度から17年度にかけて本館で行った共同研究「韓国社会——グローバル化の諸局面」（研究代表 朝倉敏夫）の成果をまとめたものである。

この研究会は本館における韓国研究に関わる共同研究会として第7期にあたる。第5期、第6期は、常設展示のリニューアル、特別展の開催と時期を同じくしたため、物質文化研究に重点をおいたが、今期は、第3期の「韓国社会——伝統の形成とそのトランスフォーメーション」、第4期の「韓国社会——高度経済成長下のフィールドワーク」につながるテーマを模索することにした。

そこで本研究会は、90年代以降の韓国社会の人類学的研究をめざし、研究会のテーマを「韓国社会——グローバル化の諸局面」として、その目的を以下のようにした。「激動する朝鮮半島をめぐる政治・経済情勢の中で、90年代に入り、韓国社会はドラスティックに変化しており、文化的にもグローバル化が急速に展開している。こうした状況の中で、アジアの他地域の状況も参考にしつつ、韓国社会が経験するさまざまな局面における変化を追求することにする。それには、中国・アメリカ合衆国・日本・中央アジアなど、500万人を超える海外に居住する韓国人がおり、グローバル化の中で、彼らの母国との関係やその果たす役割も視野に入れなければならない。また、本研究では、現在進行形で展開するさまざまな問題についての議論を通して、韓国社会の人類学的研究を行う上で、今後採りうる研究課題と研究方法の可能性を追求していきたい」というものである。

韓国では1994年に金泳三大統領により「世界化」という言葉を使つての韓国社会の行くべき道の構想が出されており、研究代表者としての私は90年代以降の韓国社会の変動を示すキーワードとして「グローバル化」という用語をテーマに掲げてみた。しかし、第1回の共同研究会で「グローバル化」という概念についての検討がなされ、韓国社会における「グローバル化」は、日本の植民地期、開化期、14世紀、さらには古代にまでもさかのぼって捉えることができるのではないかという議論が出された。現代に視座をおきつつも、歴史の中で捉えるべき「グローバル化」をテーマにするという混乱が、私の最初の問題提起にあったため、研究会のメンバーの中でもさまざまな概念の混乱が生まれ、発表テーマが拡散してしまった感もなくはない。ただ、その中から、『民博通信』で中間総括したように、これまでの韓国社会・文化をシステム（体系）や歴史的過程を中心に捉えた研究から、海外のコリアンとの関係性、「もの」や「ものの流れ」、「産業」も視野に入れ、そのダイナミズムをいかに人類学が捉えうるか、そのために従来的人类学的韓国研究の何を括弧に入れ、解体せねばならないのか、という問いかけに向かうこ

とができたと考える [拙稿 2005 「『拡大』から『脱構築』へ」 『民博通信』 109:20-21]。

さて、本書は、研究成果をできるだけ早期に刊行するという『調査報告 (SER)』の趣旨にそって、この研究会での発表を基として、完成された論文ではなくとも、現在までの研究成果を報告してもらうことにした。集められた原稿をまとめると、大きく2つにまとめられる。一つは韓国社会の「内」で進んでいる問題、二つは韓国社会の「外」で進んでいる問題である。そこで、本書のタイトルを『グローバル化と韓国社会——その内と外』とした。そして、原稿の掲載順を、韓国内から韓国外へ、日本、アジア、そして世界へと、地域的な広がりをもたせた。掲載順に、それぞれの論文を紹介しよう。

まずは、韓国社会の内で行っている問題を扱った報告である。最初は、「韓国の人類学」を足がかりとしてグローバル化の民族誌を構想するための準備作業として、韓国地方社会のフィールドワークを通じて得た知見を、ローカルな脈絡と外部の諸脈絡との複合的な結合と再帰的な意味づけという観点から再検討した本田の論考である。これに続き、嶋は、1996年から大邱広域市で行ってきた高層アパート団地に出現した露天商街の調査を、70年代以来韓国各地で行ってきた調査と重ね合わせて、写真とともに韓国社会の変化を概観し、経済成長とグローバル化が生活現場に及ぼしてくる影響の多様なあり方を見せてくれている。

秀村は、韓国における葬礼をめぐる慣習の中で1990年代に大きく変わったものとして火葬率の急増と葬礼の場の変化をとりあげ、その背景に核家族化を初めとする家族関係の変化、父系意識の希薄化などを指摘している。こうした近年の韓国で見られる死者への対処法の変化の一つとして、川上は韓国仏教の死者儀礼への関与を指摘する。そして、韓国仏教の曹溪宗で行われる死者儀礼と、円仏教で実践されている死者儀礼をとりあげ、韓国仏教の近年の状況を考察する。

洪の報告は、韓国社会がどのような背景の下で海外養子を送り出したのか、その時代別特徴を踏まえ、成人して韓国社会に戻ってきた海外養子が、韓国社会にむけてどのような発信をし、どのような自画像を描こうとしているかを考察したものである。

韓国社会の内においては、近年、グローバル化にともない、外国人労働者の増加、国際結婚の増加といった問題も起こってきている。こうした問題も、今後はとりあげていかなければならないだろう。

次に、韓国社会の外で行っている問題のうち、まずは日本とのかかわりを論じたものを掲載した。鈴木文子は鳥取県の山村に居住する板祐生というコレクターのもとに、明治末から終戦までの間に集められた植民地であった朝鮮半島関連の蒐集品を手がかりに、日本の一山村で日本帝国の姿や情報がどのように伝えられ、人々がどのように往来していたかを検証し、帝国主義という不幸な形で始められた近代日本のグローバル化現象を考察している。広義のグローバル化は、帝国の出現と結びついたものでもある。今日の人、モノの移動と文化の関係を考える上で、帝国主義時代の人の移動と情報の関係

を考察することは重要である。

日本社会においては、「在日」の問題がある。島村は、「日雇い労働者街という特定の地域」である「寄せ場」と朝鮮半島系住民（集住地区）との関わりについて、福岡市築港の事例を中心として民俗誌を提示する。この論文は、「寄せ場」と朝鮮半島系住民との関わりという問題が、世界各地の海外コリアンの生活の中でどのように位置づけられるかについて、その歴史的・社会的背景も含めて考察し、将来の比較海外コリアン研究に向けての比較の指標を提示しようという意欲的なものである。岡田は、震災後の神戸および兵庫県の在日コリアンの運動を事例としてとりあげ、「多文化共生社会の実現」をめざす政策、運動におけるエスニックマイノリティの選択の問題を検討し、グローバル化がもたらした他文化状況の中で在日コリアンがどのような問題に直面しているかを考察する。また、浮葉は、ここ数年、新来コリアンの経営する飲食店や雑貨店が急速に増え、これまでの在日韓国人の集住地域とは別の場所に新たなコリアンタウンが形成されている名古屋において、在日コリアンと新来コリアンの接点が思いの外少なく、両者の接触場面では葛藤が少なくないという報告をした。

次の2編はアジアを舞台とする報告である。韓景旭は、在中コリアンにおいて、旧来の朝鮮族だけでなく、急増する韓国人と北朝鮮からの脱北者を視野にいれた「新朝鮮族」に注目しなければならないと指摘する。今回は、新朝鮮族の予備軍としての北朝鮮人が、具体的にどのような理由と方法で祖国を離れ、また中国に渡ってからは旧来の朝鮮族や漢族、韓国人とどのような関わりをもつのかもこれらの実態の一面を脱北ものの口述によって明らかにする。また、李愛俐娥はさまざまな地域から多くのコリアンが集まる沿海州コリアンコミュニティにおいて、そのときどきの都合によって協力あるいは競争しながら生活している彼らが、この地域でどのような立場におかれ、いかなる役割を担っているかを報告している。

海外に居住するコリアンは、約600万人と推計される。その居住地は、日本、中国、中央アジア、サハラ以南のユーラシアのみならず、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、そして中南米にまで広がっている。そうした海外コリアンに対して、近年「韓人」という呼び方がなされるようになってきている。林は、この韓人という呼称が海外に居住するコリアンにいかん作用し、それがいかに韓国政府の意図と結びついているかを指摘し、この韓人が浸透していく背景こそ、グローバル化時代の韓国社会の一局面を指示しているという。朝倉は、アメリカ合衆国、オーストラリア、中国で発行されている「韓人録」の概要を紹介し、そこから海外コリアンの生活文化の研究に対するサジェスチョンを試みている。

最後の金恵信は、韓国近現代期の美術を中心とする視覚表象のイメージ分析を研究テーマとしているが、海外コリアンをコリアン・ディアスポラと規定し、韓国でのビエンナーレ展示と日本での国際シンポジウムを事例として、コリアン・ディアスポラとそ

のアートについて、とくに歴史とそれをめぐる記憶の表象の観点から考察している。

ここで、韓国の「内」と「外」という形でまとめて編集することで、韓国社会が「内」から「外」まで、いかにダイナミックに動いているのか、読者には一瞥できたのではないだろうか。ただ、各論考において論じられているように「内」と「外」がさまざまに絡み合っており、「内」と「外」の現象が二分法的に分けられるものではない。韓国社会は世界の動きとつながっており、海外コリアンの社会も韓国社会の動きとつながっていることはいうまでもない。

また、一般にグローバル化という問題設定を想定した場合、本書で扱われている対象は19世紀末から現在までを含んでおり、やや奇異な感を抱く読者もいるであろう。確かに経済的システムを検討する上でのグローバル化は20世紀中頃から顕著な現象となったとされるが、社会、文化のグローバル化を検討する場合には、どこにその起点を置くかということが常に問題となる。この問題が発生すること自体、グローバル化がもつ複合性と、現象としての多様性という性格があり、それぞれの分野で描かれるグローバル化像は異なってくる。

近年のグローバル化論は、「西欧」の膨張と植民地支配、「西欧的」な世界システムといった西欧の植民地主義と帝国主義、その後の資本主義システムの世界的展開と社会の流動性、後期資本主義における文化の商品化などに焦点があてられる傾向がある。つまり近代の連続として現在のグローバル化を見る視点に立っており、これは本書の基本的視点となっている。

「西欧」の膨張に関わるグローバル化を中心に据えていくと、グローバル化がもっている複合性と現象としての多様性を看過する可能性がある。この点で、朝鮮半島を具体的なフィールドとして中心に据えてグローバル化を検討する事は意味がある。すなわち、19世紀まで厳しい鎖国政策をとっていた朝鮮王朝は、19世紀末に朝鮮半島に先んじて近代、つまりグローバル化にさらされた日本により「開国」し、主に日本を経由したグローバル化の波にさらされた。つまり朝鮮半島におけるグローバル化には明確な起点が設定でき、そして、それが「西欧」そのものが流入することによって、大きな社会・文化変動が起きたという特徴がある。つまりグローバル化が「西欧」を基盤としつつも、それが波及的に非西欧社会から非西欧社会へと世界の諸社会に及んでいくプロセスを検討する上で、朝鮮半島は注目すべき事例を提供すると思われる。

さらに、朝鮮半島で現在進行中のいわゆる「グローバル化」と近代以降の朝鮮半島のグローバル化を比較検討することにより、今日世界の諸社会で起きつつある今日のグローバル化の新たな側面に照射することも可能となるであろう。